

高校生が幼児に教える活動を取り入れた保育体験学習

小清水 貴子*

(平成 21 年 10 月 30 日受理)

A Study of Experience in Childhood Education and Care with Students' Teaching
Activities for Infants in Home Economics Education

Takako KOSHIMIZU *

(Received October 30, 2009)

I. はじめに

少子社会の到来により、家庭科教育においても、生徒の子育て理解を深めるため、保育体験学習が推進されている。平成 20 年告示の高等学校学習指導要領「家庭基礎」「家庭総合」ともに、その内容の取扱い¹⁾において、「学校や地域の実態等に応じて、学校家庭クラブ活動等との関連を図り、乳幼児や高齢者との触れ合いや交流などの実践的な活動を取り入れるよう努めること」と明記されている。これまでの保育体験学習の授業実践²⁾において、異世代とふれあう機会が少ない生徒にとって、幼児と接する学習活動は、幼児の成長や発達を理解を促すこと、幼児との接し方を学ぶことに役立つこと、自分の育ってきた過程を振り返るなど、生徒自身の自己理解に資する学習活動であることが明らかにされている。

また、今回の指導要領³⁾では、「家庭基礎」の「(1)人の一生と家族・福祉 イ乳幼児の発達と保育・福祉」では、「乳幼児の心身の発達と生活、親の役割と保育及び子どもの福祉について理解させ、子どもを生み育てることの意義を考えさせるとともに、子どもの健全な発達のために、親や家族及び社会の果たす役割が重要であることを認識させる」、 「家庭総合」の「(2)子どもの発達と保育・福祉」では、「子どもの発達と保育、子どもの福祉などについて理解させるとともに、子どもの健全な発達を支える親の役割と保育の重要性や社会の果たす役割について認識させ、保育への関心をもたせる」ことが、それぞれ明記されている。つまり、保育の学習では、親の役割だけでなく、子どもの健全な発達を支える社会の果たす役割についても、生徒に認識させる必要がある。

高校生も社会を構成する一人である。したがって、生徒自身が子どもの健全な発達を支え、次世代を育成していく立場にあることを認識できる学習が求められるといえる。

II. 研究目的

そこで本研究では、高等学校の保育体験学習において、生徒が、将来、次世代を育成す

*長崎大学教育学部 生活・健康講座 (家庭科教育)

る立場に立ち、社会の一員としての自己の立場や役割を認識し、行動できる学習活動を取り入れることが有効であると考えた。生徒に社会の一員であることを認識させるには、自分が誰かの役に立っているという実感が必要である。そこで、生徒が社会に貢献できる力を生かす学習活動として、生徒自身が学んできたことを幼児に教える活動を、保育体験学習に位置づけた。相手に何かを教えるには、主体的に相手にかかわらざるを得ない。また、教える相手の立場に立ち、自分が果たすべき役割を考えなくてはならない。「教える」という、能動的で主体的な学びを引き出す仕掛けを授業に取り入れることにより、生徒の子どもに対する理解を深め、学習への関心を高めることができるのではないだろうかと考えた。

本研究で目指す生徒の姿は、社会における自己の役割を認識し、社会みんなで子どもを育てる視点をもてる生徒である。つまり、1) 課題を内面化し、自己の役割を自覚すること、つまり、幼児に対して、自分に何ができるか、自分のできることを考える生徒、②他者を理解しようと努めること、つまり、教える対象である幼児をよく観察し、幼児の目線にたつことができる生徒、③他者とかかわる体験学習から、互いに成長しあうことを理解すること、つまり、教えることは教えられることであり、人とかかわりは双方向であることに気づくことができる生徒である。

そこで、本研究では、生徒の次世代育成能力を育むことをねらいとして、高校生が幼児に「教える」という学習活動を取り入れた保育体験学習を実践し、その有効性を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究概要

家庭科の選択科目「発達と保育」において、前述の目的に基づいた保育体験学習の授業を計画・実践し、生徒の学習記録から授業の分析と検討を行った。体験学習は、地域にある社会福祉法人Y保育園の連携協力を得て、校内の農場を活用して高校生が幼児に食育を行う学習活動を、3回にわたって実施した。

2. 研究対象および授業実施時期

研究対象は、国立大学附属高等学校の3年次生67名(男子8名, 女子59名)である。同校は総合学科で、授業対象生徒は家庭科系の科目を多く履修する生活・人間科学系列に所属する生徒である。卒業後は約8割の生徒が大学・短大、専門学校に進学する。校内の敷地は広く、水田や畑、鶏舎、豚舎などがある農場を有している。授業は2005(平成17)年4月～10月に実施した。本授業にかかわった幼児は、3歳児クラス(20名)、4歳児クラス(20名)、5歳児クラス(21名)の計61名である。

3. データの収集および分析方法

本研究では、毎回の授業後に生徒が記述した学習記録(3回分)、授業後の振り返りシートを、主なデータとして用いた。分析対象としたデータは、不備のあった8名を除き59名を対象とした。この他に、生徒の実態を把握するため、事前アンケート調査、各回の授業における観察・ビデオ録画、打ち合わせにおける保育士のコメントを補足データとして用いた。保育士との打ち合わせは、授業実施前後合わせて、計7回行った。

データは、各実習記録、振り返りシートごとに、記述項目に従って整理した。分析にあたっては、生徒が記述した内容をよみとぎ、必要に応じてカテゴリーを生成し分類・解釈した。さらに、生徒個々の意識の変化を探るために、3名の生徒についてケーススタディを行った。その後、授業全体を通して、生徒と幼児のかかわりと中心とした学習活動の成果について検討を行った。

Ⅲ. 結果および考察

1. 授業のねらいおよび授業展開

(1) 本授業の位置づけ

授業の立案に際し、授業担当者と連携する保育所の保育士で打ち合わせを行った。行事や施設・設備等の事情をふまえ、教科書やこれまでの保育体験学習の実践例を参考に、授業のねらいや内容について検討を重ねた。Y保育園では、近年、食育にとくに力を入れており、年間を通じて園児に食の大切さを教えるプログラムを組んでいる。生徒は、1年次に「家庭基礎」、2年次に「栄養」を受講しており、食に関する知識を有している。そこで、お互いがかかわるテーマとして、食を取り上げることにした。そして、①食べ物を大切に実感をもたせるため栽培体験を行う、②体験学習は保育士や教師が主導せず生徒主体で行う、③人間関係づくりの視点から年間を通じて交流することにした。栽培する作物は、生徒にも幼児にも身近な米を取り上げることにした。生徒が幼児に「食の大切さ」「おいしく残さず食べることの大切さ」を教えることを中心に据えて、田植え、草取り、稲刈り、調理の各活動を行うことにした。

(2) 授業計画

授業計画は表1に示した通りである。生徒主体の体験学習にするために、活動では事前準備に重点をおいた。とくに、鎌や包丁を扱う稲刈りと調理実習については、安全管理を徹底させるためリハーサルを行った。また、第2回の幼児期の食の大切さや食べ物の大切さを教える活動についてもリハーサルを行い、生徒同士で意見を交換させ、幼児にわかりやすく伝えるにはどのようにすればよいかを考える機会を設定した。

(3) 授業の様子

1) 第1回 田植え・農場散策・交流活動

園児と初めての交流でお互いに緊張感が見られた。園児と生徒はあらかじめ編成された3つのグループに分かれ、ローテーションで活動を行った。各グループに保育士1～2名、教員1名がついた。田植えでは、生徒は前日に練習を兼ねて水田の半分の作業を行った。当日は、園児の両側を生徒がはさむ形で一列になり、作業を進めた。田植えを終えた園児の着替えでは、泥でまみれた園児の靴を洗う生徒の姿が見られた。農場散策では幼児とマンツーマンで農場を散策した。畑で栽培している作物を幼児に説明したり、鶏舎でヒナ鶏を抱っこさせたり、豚舎でミニ豚の様子を観察した。つぎの活動で、子どもたちに食べ物の大切さを教えることから、幼児の動きやお弁当の中身を観察する姿が見られた。

2) 第2回 稲刈り・食べ物の大切さを教える活動

田植えと同様に、生徒と幼児がマンツーマンで稲刈りを行った。食べ物の大切さを教える活動では、各グループに分かれ、卵、肉、野菜、米の生産過程や調理法などを、紙芝居やぬいぐるみ、歌、自作ビデオを使って、幼児にプレゼンテーションをした。幼児と手遊び歌で盛り上がる様子が見られた。授業後のお弁当タイムでもプレゼンの話題が出るなど、幼児にとっても印象深かった様子であった。

表1 保育体験学習「幼児とともに学ぶ食育」の授業計画

学習全体のねらい			
(1) 幼児と直に接し、授業で学んだ幼児の成長・発達の理解を深める			
(2) 幼児期の食のあり方を考えて、幼児に食の大切さを教える活動を行う			
(3) 幼児との交流から、次世代を育成する立場にあることを自覚する			
	授業時数	学習のねらい	学習活動
第1回	第1・2時	(1) 幼児の成長・発達を理解する	活動計画の立案と準備 ①グループ分け ②活動の準備(晴天/雨天)
	第3・4時	(2) 幼児とコミュニケーションをはかる	第1回体験学習(田植え・農場散策・交流活動)
	第5・6時		学習の振り返り(記録写真・ワークシート)と次回の課題
第2回	第7・8時	(1) 幼児の成長・発達を理解する (2) 幼児にわかりやすく伝える	体験学習の活動計画の準備
	第9・10時		リハーサルと活動内容の修正、当日の確認
	第11・12時		第2回体験学習(稲刈り・プレゼンテーション)
	第13・14時		学習の振り返り(記録写真・ワークシート)と次回の課題
第3回	第15・16時	(1) 幼児の成長・発達を理解する (2) 幼児の年齢に応じた支援をする	リハーサルと当日の確認
	第17・18時		第3回体験学習 調理実習(さつま汁、おにぎり、おはぎ)・交流活動
	第19・20時		①第3回体験学習の振り返り ②全3回の体験学習の振り返り

3) 第3回 調理実習・交流活動

収穫した米を用いた調理実習について、調理系の科目を選択している生徒が中心に企画した。安全を徹底するために、包丁を使う作業は5歳児、おはぎ、おにぎりは4歳児と、年齢によって活動を別にした。調理前になぜ手を洗うのか、包丁の握り方など、幼児に教える場面が見られた。生徒と幼児を合わせて100名以上の活動で、調理室と普通教室に分かれての実習となり、教員、保育士の目が十分行き届かなかったという課題が残った。

2. 生徒の学び

(1) 体験学習で学んだこと

各授業後の振り返りシートにおいて体験学習を終えて感じることを、「とくにそう思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の4段階で聞いた(表2参照)。その結果、「とくにそう思う」と回答した生徒の割合が高かった項目は、「また園児たちに会いたい(61%)」、「体験学習は楽しかった(54.2%)」、「たくさん学ぶことができた(44.1%)」であった。

つぎに、生徒が体験学習を通して具体的にどんなことを学んだのか、生徒の学習記録から、

「学んだ」「わかった」など学びにかかわる用語を含む文を抽出し、内容による分類を行った(表3参照)。その結果、「子ども理解(精神・情緒面)に関すること(41.8%)」がもっとも多かった。ついで、「コミュニケーションに関すること(17.3%)」「教えることに関すること(14.5%)」「子ども理解(身体的・運動面)に関すること(10.9%)」「子ども観・子どもに

表2 体験学習を終えて感じたこと

	人数(%)				
	とくに そう思う	思 う	あまり 思わない	思 わない	合 計
食育について考えることができた	14(23.7)	39(66.1)	5(8.5)	1(1.7)	59(100.0)
子どもの発達の様子がわかった	13(22.1)	32(54.2)	14(23.7)	0(0.0)	59(100.0)
保育や保育士の仕事がわかった	21(35.6)	35(59.3)	3(5.1)	0(0.0)	59(100.0)
子ども観が変化した	20(33.9)	35(59.3)	4(6.8)	0(0.0)	59(100.0)
体験学習は楽しかった	32(54.2)	24(40.7)	2(3.4)	1(1.7)	59(100.0)
また園児たちに会いたい	36(61.0)	18(30.5)	4(6.8)	1(1.7)	59(100.0)
たくさん学ぶことができた	26(44.1)	30(50.8)	3(5.1)	0(0.0)	59(100.0)

表3 学びにかかわる記述の分類

分 類	記述数(%)	記 述 例
子ども理解(精神・情緒面)に関する こと	46(41.8)	○子どもは何でも「あれなんでー?」とかいっぱい質問してくる。いつも疑問を持っていることがわかった。 ○気に入ったものがあるとなかなかそこを離れないことがわかった。
コミュニケーションに関する こと	19(17.3)	○走り回ったりして話を聞いてくれないときは、目をみて「ちょっとお姉ちゃんの話聞いてくれるかな」といったら、きちんと聞いてくれた。目線を合わせて話すことが大事だとわかった。
教えることに関する こと	16(14.5)	○子どもがあんまり好きでなかったけど、交流を通して少し好きになった。子どもはあまり難しい言葉は理解できないと思っていたけど、ちゃんと話せば理解してくれることがわかった。 ○子どもは何でも素直に聞いてくれるし、どんなことにも反応してくれるから楽しくできた。反面、こちらからの情報をそのまま受け取ってしまうため、変なことや教育上まずいことは教えないように気を配った。
子ども理解(身体・運動面)に関する こと	12(10.9)	○保育の授業で、子どもは頭と体のバランスが悪く(頭が大きいから)よく転ぶと学んだ。一緒にサッカーや競争をしたときに、みんなよく転んで「あー本当だ」と思った。でも、転んでも転んでも全然へっちゃらっていう子どもたちをみて、すごいなあーと関心した。
子ども観・子ども に対する見方に関する こと	9(8.2)	○子どもは言うことを聞かないイメージがあったが、ちゃんと接すれば素直に応じてくれることがわかった。
保育士の仕事に関する こと	8(7.3)	○子どもはめっちゃくちゃパワフルで元気で、保育士の仕事はとて大変だと実感した。

対する見方に関すること(8.2%)」「保育士の仕事に関すること(7.3%)」の順であった。

「教えることに関すること」に分類した記述内容をあげると、「幼児はいろんなことに好奇心をもち、何でも吸収しようとしている」「パワーを吸い取られる。純粋に自分たちのことを信じているから間違っことを教えられない」と、幼児の様子を深く観察したり、幼児に対する自分の役割を認識した様子が見られた。また、「幼児に教えるためにまず自分がそれについて学ばなければならなかった」「どうすれば子どもが楽しく食育を受けられるかということ考えた。子どもたちを楽しませるコツを学んだ」など、生徒が主体的に学習に取り組み、幼児の視点に立ってかかわろうとする姿勢が読み取れた。

(2) 体験学習に臨む気持ちの変化

体験学習に臨む気持ちの変化(図1)をみると、第1回目は「普通(35.6%)」、第2回目は「まあ楽しみ(49.2%)」、第3回目は「とても楽しみ」「まあ楽しみ」が同数の35.6%が多かった。初めて幼児と接した第1回目は緊張したり、必要以上に興奮しながら、第2回目の食べ物大切さを教える活動に向けて幼児の様子を観察していた生徒が多かった。2回目には幼児たちも慣れ、生徒にも余裕が出て、積極的に幼児にかかわろうとする姿勢がみられた。3回目になると、子どもに振り回されている自分を客観的にとらえる生徒や、幼児とより深いつながりをもてるようになった生徒もいた。

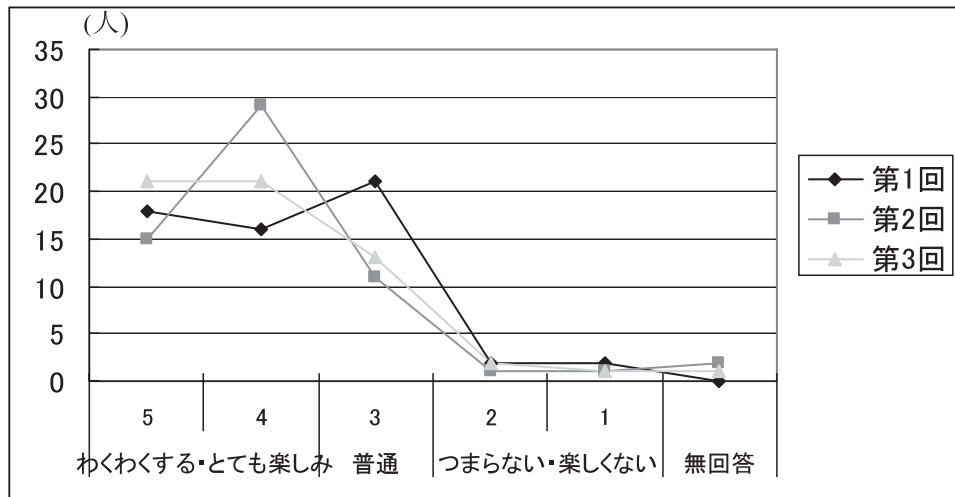


図1 体験学習に臨む気持ちの変化

(3) 生徒の意識の変容

生徒の意識の変容を探るために、3名の女子生徒についてケーススタディを行った。事前調査において、生徒Aは「将来、2人くらい子どもを持ちたい。家族が明るくなると思うので、子どもを育てたい。男の子と女の子が1人ずつなら、楽しみが両方あっていい」と記述し、子どもにも食にも関心が高く、教えることに積極的な生徒である。生徒Bは「自分の子どもは絶対かわいいし、生きがいにもなる。人間を生み出せるのは女にしかできないのだから、女なら産んでみたい」など、子どもは好きだが、保育体験学習はあまり楽し

みではないという、子どものとのかかわりに消極的な生徒である。生徒Cは「子どもは持ちたくない。子どもは苦手。姉が産んでくれるから、自分は産まない」と記述し、子どもに嫌悪感を抱き、教える活動に否定的な生徒である。

この3名の生徒が各回の学習記録に記述した内容を表4に示した。「教えること」に関する記述には下線を、「子ども理解」に関する記述には波線を付した。第1回目の記述をみると、生徒Aは「子どもは一緒に何かをやると言ってやろうとしても、自分自身そのことに興味がないとなかなかちゃんと動いてくれないと感じた。…わかりやすく楽しく伝えるためには、こっちが一方的に話すのではなくて、子どもたちも参加できるような形にするのがいいかなと思った」と記し、自分が幼児に教える立場であることを自覚していた。それに比べ、生徒Bと生徒Cは、子どもとの関係性を築くことに視点を置いていたことがわかった。

表4 各回の学習記録における記述内容の比較

	食に関心が高く、 教えることに積極的な生徒A	子ども好きだが、 かかわりに消極的な生徒B	子どもに嫌悪感、教える 活動に否定的な生徒C
第1回目	<u>子どもは一緒に何かをやると言ってやろうとしても、自分自身そのことに興味がないとなかなかちゃんと動いてくれないと感じた。だから、これから食育を一緒にやっていく中で、子どもたちが興味をもてる内容にしないと、「みんなで楽しく」は難しいなあと感じた。わかりやすく楽しく伝えるためには、こっちが一方的に話すのではなくて、子どもたちも参加できるような形にするのがいいかなと思った。</u>	石を拾って配っている子がいた。私にもくれるというので喜んでもらった。石を運んで道路にいたので、「ここに置きちゃだめよ。石たちが元の場所に戻りたいって。戻してあげようね。」と子どもを傷つけずに誘導した。自分からは、なかなか近寄れなかった。子どもは素直で自分中心。アクロバティック。	ご飯を食べるときに、相手の好きな食べ物について話した。たくさん話す子もいれば、少ししか話さない内気な子もいる。子どもはみんな元気だと思っていたけど、違った。もっと積極的に話しかければよかった。
第2回目	<u>子どもたちは本当に何でも興味をもっていて、どんどんいろんなことを吸収していくということ。話をしたことにはちゃんと反応してくれるし、実行してくれる。だから、この時期に私たちが話すこと、見せること、教えることについてはとても責任があると思う。それは食についてもいえることで、私たちの食に対する考え方や行動が子どもたちに大きく影響があることがわかり、責任をもって行動しようと思った。そして、全体を通して感じたことは、子どもは食に関することがわかった。プレゼンのときなどはそれがよくわかった。今回、子どもたちが学習している姿を通して、自分自身の食の知識や習慣を見直す機会になった。</u>	始めに先生にしがみついて泣きじゃくる女の子がいて、お母さんが恋しくて泣いていた。嫌がったので、あきらめようとしたが、先生も協力してくれたので頑張った。もうだめかなと思ったりもしたが、だんだん私の問いかけに答えてくれるようになった。稲刈り作業が楽しいらしくて、すっかりご機嫌もよくなった。子どもとはその時、その時で人が変わったように見える。さっき泣いていたのに、いまは笑っている。そんな変化が面白かった。子どもたちが楽しそうにしていることがうれしかった。自分にはできないことをしたり、自分には感じられない発見をしたり、まだ生まれて4年くらいしかたっていない人間でも、もうこんなに生きているのかということに驚きを感じた。	稲刈りを子どもとした。けがをさせないかと心配だったけど、園児も気をつけようとしていた。結構、子どもも子どもなりに考えて行動しているんだなあと思った。「大丈夫?」とか皆で言っていたけど、心配することはあまりなかった。

第3回目	調理班だったので、園児と一緒に料理をした。園児は調理台で料理している姿が珍しかったのか、とても興味を持つ目でこちらをみていた。高校生と一緒に野菜などを切っていたが、普段ちょっとでもやっている子とやっていない子の差はあったと思う。食べるときも集中して、残さず食べていた。お弁当を残す子どもが多くて心配していたけど、「自分たちで作った」ものは残さず食べていて安心した。 <u>実践を通して初めて身につくのではないか</u> <u>と思った。</u>	まだ、4年しか生まれてから経っていないのに、人間の形をしていてすごいと思う、毎回人間ってすごい。私が片づけをしているときに、一人の男の子がウロウロしていて、ガスコンロを端から端までひねって回っていた。「あれ、危ないよね？注意すべきだよ。でも先生も何も言わないし、どうしよう」と思いながら片づけを続けた。どの班もガスの元栓は切っていたはずと思ったけど、私の班の元栓は開いていて、子どもがひねると火がついた。急いで火を止めて、「危ないからダメ」というと、子どもは火がついた驚きからかすなりやめた。私は後悔した。 <u>最初に見たときに注意すればよかった。人の子を先生でもないのに、注意するという不安から言えなかった自分に腹が立った。誰だから注意している、してはいけないということはないのに。以後、何かそういう場面に出くわしたら、はっきりといえるように心がけたいと思った。</u> 調理側にまわったことで、他の人とは少し違った出来事から学ぶことができた。	小さいおにぎりをいっぱい食べて、前回の弁当よりも残してなかった。体を動かすことがあまりなかったから、少しつまらなそうだった。あまり子どもと遊べなかった。
------	--	--	--

表5 体験学習を終えた後の記述内容の比較

	食に関心が高く、教えることに積極的な生徒A	子ども好きだが、かかわりに消極的な生徒B	子どもに嫌悪感、教える活動に否定的な生徒C
保育体験学習を終えて	食育について教えていて、お弁当を残す子どもたちが減ったこと。1回目にはジュースが配られていたけど、2回目には水でよかった。どうしたら子どもが楽しく食育を受けられるかということを考えて。そして、子どもたちを楽しませるコツを学んだ。歌や絵を取り入れるとよい。子どもと視線を合わせて話すと、ちゃんと聞いてくれる。	一口に子どもといっても人間という生物的な面で見るとたった4年くらいしか生まれてたっていないのに、18年も生きている自分と同じくらい人間として必要どころが成長していることに感動した。ヒトの成長の早さに驚いた。先生から離れなかった子どもが私の手をつかんで微笑みかけてくれるまで変化したことが印象的だった。	私は子どもが嫌いだだったので、あまりやりたくなかった。米作りやその過程の説明も私たちがすべて行うのは納得がいかなかったからだ。しかし、子どもたちと何回か食事をしていると、自分なりの付き合い方というものが少しだけわかったと思う。確かにうるさいし、話していることがよくわからないけど、彼らは彼らなりにものを考えていて、自分の意思で行動し、協力したりしている。これは私たち高校生にもいえることで見下していたのだと反省した。彼らは体力的にも精神的にも未発達だけど、それなりに頑張っているのだと感じた。今も子どもが苦手なのは変わらないけど、嫌悪ではなく苦手に変わることができただけでも私が成長したしるしだと思った。最初に比べると、全然違う(保育での)もの見方ができるようになった。子どもとはバイトや街で出会うことも多いので、この経験が役立つとよいと思う。

生徒Bは、体験学習に消極的ながらも幼児とかかわることを意識して活動に臨んでいた。3回目の体験学習で、ガスコンロをいたずらしていた幼児に対して、「最初に見たときに注意すればよかった。人の子を先生でもないのに、注意するという不安から言えなかった自分に腹が立った。誰だから注意していい、してはいけないということはないのに。以後、何かそういう場面に出くわしたら、はっきりといえるように心がけたいと思った」と、自身の役割を認識し、大人として責任をもった行動をすることについて考えた様子うかがえた。

生徒Cは、校内に幼児を迎えて生徒がすべて幼児の相手をする学習活動に対して、「食の大切さを教えるのは、保育士の仕事で私たちがなぜしなければならないのか」という不満を持っていた。しかし、活動を通して幼児とのつきあい方を考え、自分が成長したことを体験学習後の振り返りシートに記述している（表5参照）。「…子どもたちと何回か食事をしていて、自分なりの付き合い方というもの少しだけわかったと思う。確かにうるさいし、話していることがよくわからないけど、彼らは彼らなりにものを考えていて、自分の意思で行動し、協力したりしている。これは私たち高校生にもいえることで、見下していたのだと反省した。…今も子どもが苦手なのは変わらないけど、嫌悪ではなく苦手に変わることができただけでも私が成長したしるしだと思った。最初に比べると、全然違う（保育での）もの見方ができるようになった。子どもとはバイトや街で出会うことも多いので、この経験が役立つとよいと思う」と、生徒自身が自分の成長を感じていた。これは、3回という学習活動の蓄積から得られた変化であり、また幼児とかかわりを自分の問題としてとらえられた結果であると推察できる。

この3名以外の生徒の記録では、「子どもたちは遊ぶと夢中になって時間を忘れてしまうので、トイレに連れて行ったり、時間を管理してあげないとだめだと思った」「農場散策のときクイズを出そうと考えていたけど、そんな暇はなく、子どもって予定通りにいかないものだった」などがあつた。本授業では、生徒主体で活動を行った。それにより、限られた時間の中で子どもを活動に導くには、自分たちがどのように対応し、動かなくてはならないのかを考えた生徒もいた。それに対して、幼児に教える活動にプレッシャーを感じ、「子どもに指導者として接していたので、一緒になって楽しむことができなかつた」という生徒もいた。また、学校生活で目立った行動をとる生徒が「子どもは何でも素直に聞いてくれるし、どんなことにも反応してくれるから、自分としても楽しくできた。反面、こちらからの情報をそのまま受け取ってしまうため、変なことや教育上まずいことは教えないように気を配った」と記述しており、幼児に与える影響を考えて、自分自身の行動を見つめ直した様子うかがえた。

以上のように、幼児に教える活動は、生徒それぞれが自覚をもって幼児とかかわることを促すことができる学習活動であると推察される。

IV. まとめと今後の課題

生徒にとって、授業は受身であることが多い。しかし、幼児に食の大切さを教えるという学習活動を通して、生徒は主体的に幼児とかかわり、同時に、幼児から接し方を教えられるという相互作用を生み出していた。幼児に教えるという学習活動は、「子どもは何でも興味をもってどんどん吸収する。この時期に私たちが話すこと、見せること、教えること

についてはとても責任があると思う」など、生徒に、幼児の手本として行動する自覚を促すとともに、本研究で目指す生徒像として掲げた、自己の役割の認識、他者理解、互いに成長しあうことへの理解、これら3つの項目を学習する機会として有効であるといえる。

しかし本授業においては、生徒は対象にした幼児と自分との関係性のなかで、自己の役割を認識したに過ぎず、社会全体で子どもを育てる視点にまで、十分に生徒の視野を広げられなかった。また、「自分が教えたことを幼児が理解してくれた」という認識は、生徒自身の直感的なものであり、実際に幼児がどのように受け止めたのか、教えたことに対するフィードバックを生徒に返すことができなかった。

そこで今後、以下の課題があげられる。

第1に、生徒に、幼児への働きかけに対する確実な実感を持たせることである。教えるということは責任を伴う。それは一過性のものではなく、幼児の意識の中に残る。幼児が教えられたことをどのように受け止めたのか、幼児の素朴な反応や、幼児に教えたことがその幼児の家庭にもつながっていることを、生徒が実感できる手立てを考えることが必要である。

第2に、自分が親になるというだけでなく、社会みんなで子どもを育てる意識を持たせることである。それには、子どもにはそれぞれ、その子どもを愛している親がおり、みんな子育てを支えていることに生徒が気づく必要がある。

以上の課題を解決するためには、幼児の保護者と生徒がかかわりをもつことが有効なのではないかと考える。幼児の生の声を保護者に伝えてもらうことで、生徒は幼児の家庭の様子を把握でき、目の前の幼児にいろいろな人がかかわっていることを実感できると思われる。また、こうした取り組みは、学校の枠を超え、地域と学校が連携して、幼児や生徒の成長・発達を育むことにつながるといえる。保育体験学習の充実に向けて、さらに授業改善を図ることが課題である。

V. 要約

異世代とふれあう経験が減少するなか、保育体験学習は、幼児の成長や発達を理解し、接し方を学ぶことに役立つ。しかし、将来、社会で次世代を育成する立場になる高校生にとっては、幼児を理解するだけでなく、社会の一員として自分の立場や役割を認識し、行動できる学習活動が必要である。そこで本研究では、保育体験学習において、高校生が幼児に教える学習活動を取り入れた授業を実践し、その有効性を検討した。

その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 「教える」という学習活動により、自分に与えられた課題に対して、幼児の様子を注意深く観察したり、幼児に対する自分の役割を自覚することができた。
- (2) 生徒は学習に主体的に取り組み、どのようにすれば幼児にわかりやすく伝えられるか、幼児の視点に立ってかかわろうとする姿勢がみられた。
- (3) 幼児に教えることで自分が教えられていることに気づき、かかわることで、互いに成長しあうことを理解することができた。

以上の結果より、教えるという学習活動は、幼児理解を促すと同時に、次世代を育成する立場として、幼児の手本になって行動する自覚を、生徒に促す機会として有効であることがわかった。

しかし、生徒の働きかけが幼児にどのような影響を与えたのか、生徒へのフィードバックが不十分であり、社会全体で子どもを育てる視点を十分に生徒の視野を広げられなかった。今後の課題として、生徒と保護者とのかわりを含めた授業実践が有効ではないかと考えられる。

本研究は、日本家庭科教育学会第49回大会での研究発表（於：日本女子大学）に加筆・修正致しました。

謝 辞

本授業実践にご協力をいただきました、筑波大学附属坂戸高等学校農業科の建元喜寿教諭、保育士の渋谷真奈美さんに心から御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省, 高等学校学習指導要領 家庭, 2008
- 2) 藤後悦子, 高校の「保育」体験学習を通しての子どもイメージの変化, 家庭教育研究所紀要第23巻, 2004, pp.108-118
中嶋朋子, 砂上史子, 日影弥生, 盛玲子, 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容 (第1報), 日本家庭科教育学会誌第46巻4号, 2004, pp.351-361
小清水貴子, 高校家庭科における保育体験学習を取り入れた授業実践研究, 筑波大学附属坂戸高校研究紀要第41集, 2004, pp.91-99
砂上史子, 中嶋朋子, 日影弥生, 盛玲子, 高校家庭科における保育体験学習者の意識変容 (第2報), 日本家庭科教育学会誌, 第48巻1号, 2005, pp.10-21
伊藤葉子, 中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討, 日本家政学会誌第58巻6号, 2007, pp.315-326
- 3) 前掲1)